

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.12
SUMMER 2008



『源氏物語画帖』

目次

●メッセージ

館長と立川商工会議所会頭との対談 1

●研究ノート

日本に渡来した中国の時令書について 陳捷 3

書評「藩政アーカイブズの研究」 白井哲哉 5

立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」
-『源氏物語』再生のための原典資料研究の成果として- 伊藤鉄也 8

●トピックス

機構シンポジウム「源氏物語の魅力」の開催について 11

移転記念式典の挙行について 12

移転記念特別展示「よみがえる時」の報告 12

立川市オリオン書房におけるブックフェアの開催 13

子ども見学デーの開催 13

新収資料紹介「源氏物語画帖」 14

総研大日本文学研究専攻「専攻院生の学会賞受賞について」 14

立川市からの文化発信

対 談

館長 伊井 春樹
立川商工会議所会頭 萬田 貴久



伊井 本日はお忙しいところ、ありがとうございます。3月に当館が立川に移転してきたものですから、これからしばらく、その意義とか、これからどのように立川市と協力をして、様々なことを行っていくかということをお話をしていきたいとおもっておりますけども。



国文学研究資料館の目的は、日本文学を研究していくことです。日本文学の研究と言いましても、大体、上代から、古事記、万葉から、明治の末までが担当範囲でありまして、日本文学も非常にさまざまなありますものですから、第1には、日本人が著作した日本の著作物、本だとか、万葉集だとか、源氏物語とか、そういう本が日本の中に、あるいは世界中におおよそ100万点あると。100万点ありますので、発足のときには、1年に1万編ずつ調査をしましょうと。立川にも、多分、いろんな公民館だとか、図書館とかがあるんだろうと思いますけれども、江戸時代の本だとか、鎌倉時代の古い本だとか、そういうものを全国の研究者にお願いをして、調査をしていくわけです。それを1年に1万点ずつ調査をする。そうすると100万点あるので、大体100年計画と。そうすると、大体100年かかると、日本にある本をすべて調査できるであろうと。

その調査したものの中から、いいものを大体5,000点ずつ、マイクロフィルムで収めましょうと。そうしますと、日本は災害の国ですから、古くはいろんな戦争で焼けたものもありますし、関東では関東大震災で壊滅的に古い本も、いろんな文化財もなくなりましたね。そうすると、今のうちに、本をマイクロフィルムで収めて、そ

のオリジナルのネガを永久保存していくようにしようと。そうすると、本というのが確実になくなっていくものですね。とりわけ室町時代の本だとか、江戸時代の本というのは印刷されたものでも、だんだん虫が食ったりだめになっていきますから、もう100年、200年たつと、必ずなくなっていくわけです。それを今のうちに、写真で収めて永久保存をして、後世の人に伝えておこうというのが目的でつくられていったわけです。その原本のオリジナルのフィルムを永久に保存をし、それをポジフィルムだとか、紙焼き、写真にして、研究者と共同研究をして、そして、その研究成果を社会にも還元しましょうということが発足して、我々が今、30数年たっているわけです。

日本の全国にもいろんな大学に国文学の講座がありますから、日本文学の研究をしている人たちが集まって、そのコミュニティに支えられて、この国文学研究資料館は成り立っているわけです。北海道から九州までに至っても、いろんなところに古い文庫だとか、図書館がありますから、出かけて行って調査をしていただくというふうに研究者に支えられているわけです。そういう、その支えられていたところに国文学研究資料館が成り立っているし、我々、ここにも研究者が30数人、教授だとか、准教授だとか、助教の方がいらっしゃいます。そして、事務の方がいらっしゃる。そういうマイクロフィルムで入ってきたものを、紙焼きだとか、あるいは、その資料をこの閲覧室で見させていただいて、一緒に研究もさせていただくと。そして、古い書籍も紙焼きしたり、あるいはポジフィルムで見させていただいて、研究していただくということで、今、進めているわけです。

で、ほかの大学の先生とも共同研究をしていくと。その研究成果を見ていただいたと思いますが、展示にもして、こういうものも今、集まってますよというふうに、展示も見ていただくと。それはもちろん

研究者だけではなくて、一般の市民の方にも見ていただく。そして、日本文学に関心ある方には、一般の方もこの本も見させていただくというふうにオープンにしているというふうなことで進めております。

そういうことで、1972年から品川にずっとございましたけれども、国の方針として、都内から研究機関は分散をしようということで、我々が今、先陣を切って、立川にやってきたわけです。ということで、これからは、ここにもう腰を落ち着けて、何かと立川市といろいろ共同してやっていきたいと。そして、ぜひ市民の方々にも、この国文学研究資料館を利用していただきたいと思っているわけです。

萬田 まず、最初に建物が大変明るくて開放的なのでびっくりいたしました。こういった本当に明るい開放的な建物で、国文学研究資料館というふうな、なんとなくカビくさいと言っちゃ変ですけども、そういうことを扱っている分野のお仕事をされている方々が、これほど近代的な建築物に包み込まれているということでは、本当にまず、びっくりしましたね。そのことは、本当に地域のみなさんにこの場所に目を向けていただけるようなことで、今の館長さんのお話もそうだと思いますけど、私も、商工会議所も、また観光協会も、一緒になって、そういうお手伝いをさせていただければなどというふうに思っているわけです。

伊井 非常にありがたいお話で……。

萬田 私は、先生が編者でまとめられた「一千年目の源氏物語」を半分ぐらい読んだのですが、その本で今年の9月アミュータチかわでの先生方のご講演とシンポジウムをされたこと初めて知りました。以前から、国文学研究資料館が立川に来るということはわかっていたのですが、このような姿で、しかも、今、お話の内容で、こちらに来てくださったということでは、本当に私どもも立川の誇りであると感じておりまして、お話を聞けば聞くほど、ますますその感を強くしているわ

けです。

立川は時代、時代でいろいろな試練の波を越えて、今日にいたっております。戦争があり、米軍の進駐があつて、この辺りは昭和52年に国に米軍から返還された土地なんです。それがここ30年の間に見違えるような形で、今、変貌を遂げつつあります。このことに関しては、1つは、やはり立川の過去、これは明治からの話になりますが、甲武鉄道が明治22年に新宿から立川まで、ほぼ1直線で敷かれたということが大変大きいと思います。

このことと、その後、大正11年には、陸軍飛行第五連隊が岐阜県の各務原からこちらの方へ移駐されまして、その翌年には、立川村が立川町に町制変更しているんです。立川は平坦で広大な武蔵野台地にありながら、寒村でしかなかったところに鉄道が敷かれ、飛行場ができ、そういうようなきっかけで、どちらかと言うと戦前は、そういった飛行場と軍需工場、町の人口が急増してきた経緯があるわけです。戦後は、やはり米軍がいち早くこちらへ駐留されたということで、ずっと基地の町というようなイメージが植えつけられていたわけですが、ちょうど昭和35年ごろから、立川の北口の大通りを中心にして、商業関連の大型ビルができるようになりまして、立川は、この多摩地区の中でも武蔵野、八王子、町田、立川という4つのそういった商業の核都市があるんですけれども、その中でもいち早く商都立川と言われるぐらい、そこでは大きく飛躍したんです。

それ以来、ずっと40年間、商都立川ということで来たわけですが、先ほど申し上げた立川基地の返還が昭和52年にあって、その後、国もこの基地の跡地利用ということで、最終的には3分割で使うということで、公園と、それから自衛隊基地と、これは南関東の防災基地という位置づけでございますけれども、それと、あと、こういった国の機能分散というようなことを伺っておりますけれども、そういった一環での3分割で、業務施設も含めた形の施設づくりがすすんできました。

それがちょうど昭和52年の返還以降、昭和記念公園の方は、昭和58年には一部開園いたしました。もともと基地の中に10万本ほど樹木がありまして、あと

いろいろ丘をつくったりして、また、さらには10万本ほど植樹して、当初は20万本の本が植えられ、それがもう25年も経っていますから、本当に広い土地ですし、公園としても、この公園は立川が自慢できる、また世界でもセントラルパークやハイパークに負けないくらい規模も大きいし、大変大きな都市型公園ということが言われています。最近では、去年は入場者が1年間で約350万人、だから1日に1万人を超える方がご来園をいただくということで、大変立川も、先ほどの基地の町立川、商都立川から、その名を返上するくらいインパクトのある、そういう公園の開園と。それから、もう1つは、多摩都市モノレールが、やはり最終的には平成12年に開通したのですけれども、南北にそういう鉄道関係の交通手段がなかったこともあって、昨年度は1日あたり11万5千人超の乗車人員に達しています。また、南北道路は戦後、いろいろ計画されたのですけれども、主に東京に向かう東西の道路が多くて、これは青梅街道とか、新青梅街道とか、五日市街道とか、みな東京に向かっていたのですが、そういった南北を結ぶモノレールができたということで立川が発展するインフラ整備が進んできました。



同時に、先ほど申し上げた商都立川として、昭和57年ですけれど駅ビル・ウィル（現ルミネ）ができました。これがやはり大きな弾力になりまして、大型店の伊勢丹や高島屋、中武や第一デパート。それから南で言うと、グランデュオやアレアが地元商店街と共存してきて、立川の跳躍台の役割を果たしました。その他のチェーン店も立川に進出してきて、進出した企業のほとんどが、開業時代から今日まで営業を続けているんです。

それぐらい立川というのは、平成不況の間でも、発展を続けてきたということなんですけれど、そういう中であつて、特に昭和記念公園、これは私ども本当に立川

を変える、大きなインパクトがあつたと思つていたんですが、先ほどの館長さんのお話もそうでございますけど、先般もいろいろな展示室なんかも見させていただいて、もう1つ、立川を変える、大きな要素が加わつたというふうに受け止めておりまして、本当に喜んでいて、このことを早く皆さんにお伝えしたいと、そういう思いがいっぱいというところでございます。

伊井 ありがとうございます。今、おっしゃるように、まさに駅ビルの周辺はすごい人ですよ。商都というような感じが、まさに商業の都市というのと、今度、昭和記念公園と、こういう文化施設もできますものですから、緑と文化の町というようなことで、また、キャッチフレーズでやっていただければね。で、国文学研究資料館、まさに国文学という古いことをやっておりますから、かなり研究者との閉じられた世界ではあつたんですけど、それだけでは、今からはやっていけないのですから、我々は研究成果をどんどん発信をしようということで、前からやっておりますけれども、先ほどおっしゃいました去年9月22日に、あとその半年後には立川に国文学研究資料館が来ますよというようなアピールするために、アミュータチかわをお借りしまして、講演会をいたしました。

これは、1,000人の申し込みを募ったんですけれども、2,000人からの人の申し込みがありまして、当日は1,200人からの、会場がもう満杯になるほどの人が集まりました。それは早速10月にはNHK教育テレビの日曜フォーラムで放映されたり、いろんな新聞にも出ましたし、ある程度、成功したと思つてはいるのですけれども、ああいう催しを、これから行うことによって、国文学と言いますか、日本文化というものを一般の方々にも親しんでいただくと、そして、広めていくと、そういう文化活動というのが我々は基本的な大事なことであろうと思つているのですよね。だから商業も大事なのでありますけれども、それが基盤でしょうけれども、それと同時に文化というものもお互い知り合つて、理解をしていただくと、そういう意味では、今、会頭さんがおっしゃってくださったことはありがたいと思っておりますけれども。（次号につづく）

日本に渡来した中国の時令書について

陳捷(国文学研究資料館 准教授)

中国は古来季節を重視する国である。その原因としては、古代の中国は典型的な農業社会であったため、人間社会、天地、自然、宇宙に関するすべてが季節の動きと関係していたことが挙げられるであろう。したがって、中国人の世界観は、季節と密接に関連することになったわけである。

このことは、前近代の中国思想の主流である儒家の經典および古典となった先秦、兩漢の著作に季節に関する内容が極めて豊富であることから裏付けることができる。特に、戦国時代の最末期に秦の宰相であった呂不韋を中心として編纂された『呂氏春秋』という書物の季節に関する記載の影響を受けて、『礼記』の『月令篇』、これは儒家の經典であるが、そういったものが成立し、中国人の季節観の一つの基準となった。

『礼記・月令』のような士人の礼として理想化されているものから始まり、庶民の一年中の歳時習俗を描く歳時記のようなものに至るまでの夥しい書物があるが、『礼記・月令』のような儒家經典として「経部」に入れられるものや百科事典のような類書以外は、この類の本は中国の伝統的な書物の分類においては、だいたい史部の時令類に分類されている。早い時期のものとしては、後漢・崔寔の『四民月令』、呉・周処の『風土記』、梁・宗懐『荆楚歳時記』、隋・杜台卿『玉燭宝典』、唐の『千金月令』、『齐人月令』、『金谷園記』、『保生月録』、『金門歳節記』、『秦中歳時記』、『葦下歳時記』、後魏・賈思勰『齐民要術』、五代・宋の韓鄂『四時纂要』、『歳華紀麗』などがあり、宋代以降においては、地方誌の編纂などにとともに、より多くの時令書や歳時記的な資料が残されるようになった。

ただし、これら多くの時令書は、必ずしもそのすべてが今日まで伝わっているわけではない。『礼記・月令』は経書として後世の多くの人々によって読まれてきたが、『四民月令』は宋以後の目録には

著録されておらず、宋代に散逸してしまったものと思われる。周処の『風土記』も唐代には愛読されていたが、宋代においてはすでに稀覯本となり、明代初期に散逸したものと思われる。隋・杜台卿の『玉燭宝典』も散逸してしまい、後世の人々は他の書物における引用文からその内容の一部を窺うことができるにすぎなかった。しかしながら、本書は幸いにも日本に伝わり、写本として流布していたのである。現在尊経閣文庫に所蔵されている写本は、第九巻が亡くなってはいるものの、大体においてはほぼ古い形を保ったままで残っている。

このような中国では散逸し、国外にのみ現存する書物のことを佚存書と呼ぶが、日本にはこのような佚存書が多く残されており、中国の学者も早くからこれらの資料に注目していた。しかしながら、江戸時代においては中国人の長崎以外への上陸を許されておらず、そのような佚存書を検索することは事実上不可能であった。しかし明治時代になると、多くの中国人学者が日本を訪れ、佚存書を探索できるようになった。そのような学者の内、もっとも著名な人物が、新たに設置された清国駐日公使館の随員として来日した楊守敬である。楊守敬は多くの佚存書をあつめて『古佚叢書』という叢書を刊行したが、そのなかには『玉燭宝典』も含まれている。

『玉燭宝典』の他、『荆楚歳時記』も八世紀頃日本に伝えられており¹⁾、891年頃に成立した『日本国見在書目』にも記されている。ただし、『玉燭宝典』は写本として伝わってきたが、『荆楚歳時記』の場合は、古い形のテキストはやはり中国と同様になくなってしまっている。江戸時代の元文二年(1737)に、巻頭に同年三月浪花処士山内之春洗心斎の小引を持つ、江戸日本橋北室町二丁目須原屋市兵衛と大阪心斎橋唐物町書林記北田屋清左衛門の刊本が出版されたが、これは中国明代の何允文輯『広

漢魏叢書』に収められた一巻、全三十六条のみのテキストを底本として翻刻されたものである。²⁾

『玉燭宝典』と『荆楚歳時記』は唐宋以前の古い歳時記の例であるが、それ以後の時令・歳時に関する書物はやはり日本人の関心の対象であり、日本に伝来後、訓点を附した上で出版され、広く日本国内に流布し、大きな影響を与えていたようである。例えば五代・宋の韓鄂撰、明・胡震亨編『歳華紀麗』は、渡辺通により訓点を附された上で、宝永四年(康熙四十六年、1707)に江戸美濃屋又右衛門により刊行された。³⁾明・田汝成撰『熙朝樂事』は大沢弘により訓点を附された上で安永元年(乾隆三十七年、1772)に江戸須原屋伊八が刊行している。この版本はその後使われ、『熙朝樂事』という書名の他に、題箋と見返しが『唐土年中行事』という書名になっている後印本も見られる。

このような日本に伝わり、また日本で刊行された時令書の中でも、特に興味深いのは『清嘉録』の場合である。本書は清代の嘉慶・道光年間に、蘇州の文人である顧禄が一月の「行春」「打春」から十二月の「小年夜大年夜」に至る蘇州地方の年中行事を記録した書物であり、作者自身の経験や古老から聞いた話などを記録し、また、歴史文献や郷土資料によってそれに考証を加え、さらに、これらの歳時風俗に関する詩文を収録している。本書は清の道光十年(1830)の夏に顧禄の詩集である『頤素堂詩鈔』とともに家刻本として刊行されたが、その後一年も経たないうちに日本に渡来している。江戸幕府の蔵書を取めた紅葉山文庫を引き継いだ内閣文庫に収められている同書の後には「天保二年」の朱文の蔵書印が押されていることから、本書は天保二年(1831)においてすでに長崎から輸入され、幕府によって買い上げられたことが分かるのである。天保二年三月に、儒者の朝川

善庵が江戸の書肆玉巖堂で『願素堂詩鈔』と『清嘉録』を目にし、次のような感想が残している。

「夫隔海内外、而商舶往来、一年僅不過夏冬兩度。又且長崎之於江戸、相距四十日程而遠。然而其書刻成不一年、自極西而及於極東、所謂不脛而走、是豈偶然哉。」

すなわち、当時の中国からの商船は日本の長崎に渡ってくるのが毎年夏と冬の二回しかなかった。また、長崎から江戸までの行程は四十日ほどかかる。『願素堂詩鈔』と『清嘉録』は恐らく冬季の唐船により舶来されてきたものであろうが、それにしても、朝川善庵によれば、刊行の翌年の三月には、すでに江戸の書肆において販売されていたというのである。

朝川善庵は上野の人で、名は鼎、字は五鼎、号は善庵・学古塾などと称する儒者である。医家朝川黙齋の養子であり、『善庵随筆』などの著作がある。彼が江戸で『清嘉録』を見て驚いた時から一年後の天保三年の五月に、再び彼に驚かせることが起こった。『清嘉録』の著者である顧禄は朝川善庵の名声を聞いて、李少白という日本に渡った中国商人を通して、朝川善庵に扇面の題字、作画と『清嘉録』の題字を依頼してきたのである。憧れていた中国の文人から書画を頼まれた善庵は感激し、『清嘉録』を翻刻して巻頭に序文を書くことにし、その計画を立てた。しかしながら、その後、彼は大病にかかり、三四年の歳月が過ぎ去ってしまった。そのことを知った友人の安原三平は自ら資金を出して、翻刻計画を実現させ、『清嘉録』は中国で出版された七年後の天保八年(1837)に、江戸で翻刻されたのである。江戸の書肆の他、大阪の本屋もその版本を利用して印刷を行い、このようにして、日本で印刷された『清嘉録』は日本中に広がり、広く読まれることとなったのである。

一方、中国では、『清嘉録』は顧氏の家刻本しかなく、顧家の版本が無くなった後には、『清嘉録』の版本も珍しくなり、却って入手しにくい書物となってしまった。明治十三年、日本の著名なジャーナリストであり、目薬を調製販売する楽善堂薬局の経営者でもある岸田吟香は上海に支店を設け、薬の販売と同時に、日本にあった漢籍や日本人の漢文で書かれた書物の輸出も行うようになっていた。更に彼は、日本で刊刻された中国の書物の版本を買収し、それらを使った印刷も行っており、『清嘉録』の和刻本の版本を利用して、中国で印刷出版し、それは中国人の間で大変歓迎されたのである。

始めに述べたように、中国では古来季節感を重視しているが、中国人の季節感を最も明確に表す書物である時令書は、江戸末期まで日本でもてはやされると同時に、中国の季節感や風習もこれらの書物を通して、日本の季節に関する風習や年中行事に大きな影響を与えていたのである。今回は紙幅の関係でこれらの書物の具体的な内容まで紹介することができなかったが、日本人の季節感や伝統的な風習を考える時、これらの中国から日本に伝わってきた時令書がどのように日本において広がり、どのように日本人によって読まれてきたことを、より深く検討する必要があると思われる。

に改訂を加えて『学津討源』を編纂した際に『学津討源』にも収めている。なお、陶珽『說郭』、鐘人傑『唐宋叢書』においてもその一部の抜粋を収めている。和刻本は『津逮秘書』『唐宋叢書』により一部の校勘を行っているが、著者は何故か韓退之すなわち韓愈としている。

*1 坂本太郎「荆楚歳時記」と日本」、『和田博士還暦記念東洋史論叢』所収。

*2 陶珽『說郭』本の系統。

*3 『歳華紀麗』は五代・宋の韓鄂の著作であり、明代以後の刊本は胡震亨の『秘冊彙函』に収められたものが原型となっている。胡氏は該書の写本を俞安期に贈り、俞氏はそれを『唐類函』の歳時部に収めた。後、毛晋は胡氏の残版を得て、それを『津逮秘書』に入れ、また、清の嘉慶十年(1805)に張海鵬が『津逮秘書』

書評『藩政アーカイブズの研究』

白井哲哉 さいたま文学館(元埼玉県立文書館)

編者：
国文学研究資料館
(アーカイブズ研究系)
刊行：
2008年3月、出版社：岩田書院
339頁、6,900円(十消費税)



1.

本書は、日本近世の地域政治権力である「藩」が作成・収受したアーカイブズを対象とした、初の本格的な研究論集である。「あとがき」によれば、本書の原型となったのは2006年3月23日と24日に国文学研究資料館で開催された、「地域支配と文書管理」に関する共同研究会である。

本書にはその時の研究報告を中心に7本の研究論文が収録され、さらにその手引きとなる序章が付されている。まず、目次を紹介しよう。

序章「藩政文書管理史研究の現状と収録論文の概要」(高橋実) 第1章「松代藩における文書の管理と伝来」(原田和彦) 第2章「萩藩における文書管理と記録作成」(山崎一郎) 第3章「対馬藩の文書管理の変遷」(東昇) 第4章「近世地方行政における藩庁部局の稟議制と農村社会」(吉村豊雄) 第5章「熊本藩の文書管理の特質」(高橋実) 第6章「鹿児島藩記録所と文書管理」(林匡) 第7章「村方文書管理史研究の現状と課題」(富善一敏) あとがき(高橋実)

序章では、本書の研究史上における意義と各論文の位置づけが明記される。まず、記録資料群の性質と構造を解明する「アーカイブズ資源研究」の一方法たる文書管理史分析の可能性について、それがアーカイブズを生み出す組織体の構造分析に有効であり、さらに組織論や権力論、国家論への論点を提示しようと表明される。そして末尾に掲げた65本の論文目録を前提に、近世文書管理史研究のうち藩政文書に関する研究の経緯が説明される。現状で研究の遅れは否めないが、1990年代後半以降は論文が増加しており、着実に研究の進展が見られるという。

第1章では、信濃国松代藩の文書管理史を取り上げる。現在、松代藩の関係文書群は国文学研究資料館と真田

宝物館(長野市)に分かれて保存されており、その経緯を近世の文書管理にまで遡って考察するのが本稿の目的である。まず、武家文書を「後世の歴史書編纂のために残す徴古史料(論文では「古文書」)」と「藩庁文書(論文では「真田家文書」)」に区分することを提唱し、松代藩の文書は大正7年(1918)段階で両者を区分して管理したことを示す。

前者は、後北条氏、豊臣秀吉、徳川家康など戦国期以来の重要文書を差出人別の卷子に仕立てて長持に収納し、参勤交代の際に持ち運んだ。これは近代に個人所蔵文書を収集して増加したという。また後者は、大正期に真田家伝来資料を実施した際に精査されなかった「箆笥の中」の文書群と、明治期に調査された「民政上累年の書留帳簿類」があって、この単位で真田宝物館と国文学研究資料館に分割保存されたと論じている。

第2章は、大名家の文書群を「藩侯の文書(大名家の家文書)」と「藩庁の文書」に区分しうを前提に、萩藩における藩庁文書の構造理解について「個々の役所の文書群構造を明らかにする作業を積み重ねていくのが、現実的かつ有効な手段と考え」て、そのケーススタディを示す。この方法をとった理由は、萩藩の藩庁文書が膨大な上、現在までに異なる文書群を混入させ、また同一の文書群が複数に分割される複雑な経緯をたどっており、直ちに全体構造を見通すことが困難なためである。

検討対象は、萩藩の国許役所のうち当職所、郡奉行所、上勘所、目付所、代官所で、その検討結果から最後に藩全体の文書管理のあり方を展望する。すなわち、17世紀後半から18世紀初頭には、各役所の文書保存の不完全さが問題視されて具体的対策が採られ始めた時期。18世紀中期以降は、増大する各役所の保存文書について、必要な情報を迅速に検索する体制を構築しようとし

た時期だったと論じる。さらに、当時の役人の文書保存意識についても考察している。

第3章は、対馬藩の「年寄中御預長持」における文書管理の変遷を示す。「年寄中御預長持」は御内書と老中奉書を中心に収納する保存具である。対馬藩の文書管理は、朝鮮通信使や倭館の管理など外交実務上の必要から1630年代以降整備されてきた。17世紀中葉の対馬藩では、最重要の文書群を収納する「奥御系図御長持」「御判物御長持」「年寄中御預り長持」の3つがあった。最後の年寄中が預る長持には、家光以来の將軍御内書と老中奉書が収納されていたと述べる。

そして享保期以降の御内書と老中奉書の管理について、次の3点を指摘する。すなわち、御内書と老中奉書は基本的に成巻、箱入して「年寄中御預長持」で管理したこと。基本的には藩主を基準として編年で選別成巻したが、寛政期以降は方針に変更があったこと。これらの現用目録として作成された「年寄中御預書物長持入日記」2冊(古帳・新帳)は、数十年機能して明治期にも利用されたこと、である。

第4章は、熊本藩の民政・地方行政を担当する郡方の文書である「覚帳」の記載形態を系統的に分析する。著者の意図は、19世紀の行政が「次第に農村社会からの上申文書の処理を業務とする割合を強め、ついには農村社会からの上申文書を中央行政機構における稟議制の起案書と位置づけ、民政・地方行政に関わる課題解決・政策形成をおこなう」段階に達したとの理解に基づき、その稟議制的な行政処理の確立過程を示すことにある。

まず、村方が郡方へ提出した悪品質の年貢米納入願書について、「覚帳」の処理記載を(1)17世紀前半(宝暦改革期以前)、(2)18世紀後半(寛政末年以前)、(3)19世紀(寛政末年以降)

に区分する。そして(1)では郡方衆の審議結果のみが記録されたのが、(2)では惣庄屋からの上申文書の写と審議結果を記載する形に変化し、(3)では村方からの願書の原本と惣庄屋からの上申文書及び郡代の添書の原本を「覚帳」に綴じ込み、村方からの願書の余白へ審議結果を記載したと論じる。さらに村方からの願書の余白を当初から意図したものと判断し、ここに起案書としての機能を見出している。

次に、惣庄屋の水利・土木事業実績と「覚帳」の記載を比較して、「覚帳」の記載する事柄が田畑や石高に影響を及ぼす事例、あるいは藩の資金融資を受ける内容に限られることを述べる。さらに、一件文書が大量に「覚帳」へ綴じ込まれた事例(雲仙普賢嶽噴火に伴う津波被害の復興助成)と、巨大な土木事業にもかかわらずほとんど「覚帳」に記載が見られない事例(通潤橋・通潤用水通水事業)を掲げて、それぞれ詳細に論証する。

以上の検討から、18世紀後半以降の民政・地方行政は村庄屋や手永惣庄屋の事業提案・政策形成力に依存しつつ、領主支配に関わる事案は郡方と郡代・惣庄屋の間で調整して上申させ、これを稟議決済していたと論じ、この行政の推移が「覚帳」の記載の変化に反映されたとまとめている。本章は本書の4分の1に及ぶ分量を占める、豊富な史料と重厚な実証を備えた論文である。

第5章は、第4章と同じ熊本藩の文書管理システムについて取り上げる。ここでは19世紀中葉の熊本藩庁における、文書のライフサイクルに留意した文書管理体制を検討している。まず、刑法方と寺社方及び町方の文書目録である「諸帳目録」を分析して、当時の藩役所に現用文書と半現用文書の区別や文書引継、引継後の参照、各役所による文書廃棄などの実施されていたことを明らかにする。次に、各役所の長期保存文

書や永年保存文書を管理する役所である諸帳方に注目し、その役割、文政期の文書記録管理改革、業務の実際、保存庫である御蔵・坤櫓などについて述べる。

以上から、熊本藩の文書記録の管理には現用文書、半現用文書、非現用文書の3段階があり、非現用文書は選別されて長期保存・永年保存文書を諸帳方で管理していたと論じている。

第6章は、鹿児島藩における記録所の成立過程とその職務内容を検討する。記録所は、近世初期に藩主島津宗家の文書記録や系図を管理した文書奉行(記録奉行)の職務を受け継ぎ、元禄9年大火以降は焼失文書を復元するとともに、家格・由緒の調査や現用文書の保管も手がけた。ただしその職務は秘密であった。この記録所における現用文書の保存管理の変遷と実態を明らかにするのが本章の目的である。

その結果、17世紀末から18世紀初頭の記録所では、徳川將軍家への藩主起請文、御内書・老中奉書、馬術免許状、格式・家格関係文書などが保管された。18世紀後半には島津家譜編纂事業の推進との関連で、他の役所(諸役座)の保管文書が整理されて記録所への移管が進められた。さらに19世紀に入ると幕府の国絵図調査のほか、地誌編纂や新たな家譜編纂の諸事業が進められたこともあり、「記録所が組織的かつ広範囲に文書行政に関与せざるを得ない状況にあった」と論じている。なお本章は、註における史料解説がたいへん詳細である。

第7章は、序章の課題を引き継いで、近世文書管理史研究のうち村方文書に関する研究の現状と課題を示す。従来の研究は、一方で高橋実「近世における文書の管理と保存」(青山・安藤編『記録資料の管理と文書館』北海道大学出版会、1996)を画期とする「アーカイブ的文書管理史」の潮流があり、他

方で大友一雄「由緒と文書管理」(同『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館、1999)に代表される「儀礼・由緒論的文書管理史」の動向があるとまとめる。

そして今後の課題として、近世村方文書の作成過程の研究、幕藩領主の文書管理と村方文書の保存管理との関連、「近世的文書主義」の追求、事例の蓄積を踏まえた比較と類型化の方向性、の4点を掲げている。

2.

本書の意義として、冒頭で述べたとおり、藩政アーカイブズに関する初の本格的な研究論集であることを第一に挙げるべきである。各章では萩藩、熊本藩、鹿児島藩など西日本の大名家の事例が分析の中心となったが、史料の残存状況からして妥当と言うべきだろう。そして各事例にはおのずと共通する動向がうかがえる。この点で高橋実は、18世紀後半以降になると藩政上必要な文書記録が飛躍的に増加し、「現物の文書記録そのものを管理保存するシステムの比重がしだいに大きくなってきた」という見通しを、序章で示している。これは、本書の基調をなす藩政文書管理史の理解と言えよう。

この理解を踏まえて各章を読むと、それぞれの論文は個性的でありながらも一定程度共通した歴史的展開を遂げる点がよく理解できる。たとえば、第1章、第3章、第6章では幕府御内書・老中奉書の管理実態が示された。それに関わる論点として、第1章、第2章、第6章では家譜編纂の問題が提起された。また、第2章、第3章、第5章では保存文書の検索手段である目録作成が論じられた。そして第4章、第5章では、蓄積された文書の選別保存が話題となっていた。第7章で、各事例の比較と類型化が今後の課題に挙げられていたが、藩政文書もまた同様である。こうした歴史的研究成果の積み重ねが、日本におけるアーカイブズ思想の定着を促していくことだろう。

ただし、近代的あるいは現行のアーカイブズシステムを到達点に措定し、それへの接近度から過去の文書管理システムを評価することには慎重でありたいと感じた。第4章が論じたとおり、各藩における各時代の文書管理制度は、当該期の支配・行政システムに照応したものであった。たとえば第2章で、役所の非現用文書が「不十分」に見えたとしても、当時それなりの論理と実態があったと考えてその理由を探る必要があると思った。その意味では、第4章の重厚な実証成果を近代稟議制に直結して理解することにもやや躊躇した。論文を読む限り、起案者は本来郡代であるべきところ、19世紀にはその機能の一部が上申文書＝進達文を作成する手永惣庄屋＝中間層へ移ったと理解できる。一方で、願書や上申文書の「覚帳」における保存形態の変化は、郡頭・郡間の廃止という制度上の理由が大きい。両者はいったん分けて、今一度整理する必要もあると思われた。

3.

以上は私のささいな疑問点であって、本書や各章の成果に影響するものではない。せつかくの書評の機会であるので、以下では本書の到達点を踏まえた上で今後の課題と思われる点をいくつか掲げていきたい。

第1に、研究の現時点で藩政文書をどう捉えるかである。この点、第1章では徴古史料と藩庁文書、第2章では「藩候の文書」と「藩庁の文書」という区分案を提示していた。しかし第6章の記録所の分析では、「本宗家の一家政機関が公的機関へ大きく転換して行った」という側面が指摘されていた。この記録所が後に地誌や家譜の編纂事業を担うことを考えれば、それらを峻別する前にまず藩政文書の発生に遡り、そのあり方を考える必要があると思われる。第7章が紹介した青木祐一の指摘にもつながるが、私は、現代のアーカイブズ保存

のコンセプトについて、アイデンティティ(存在証明)とアカウントビリティ(説明責任)だと考えている。これを前近代のアーカイブズに援用できないだろうか。

第2に、藩庁の文書記録の保存において編纂事業の果たした役割である。周知の通り、江戸幕府は近世前期から系譜、地誌、絵図などの編纂事業を全国規模で実施してきた。またそれとは別に、藩の側でも自らの必要に応じて編纂事業を進めたことは、本書でも明らかにされている。問題は、これらの編纂調査活動がどう藩政文書の保存にどう影響を与えたのか、逆に言えば、編纂事業がなければ文書は保存の機会を失っていたのか、である。現代の自治体史編纂の経験と実態から言えば、編纂事業は資料保存と同義ではなく、集めた資料を今後に生かすという目的意識があって初めて保存が進められてきた。由緒の時代と言われる近世の藩庁において、その実態はどうだったのか。かつて大友一雄が示した由緒論の到達点を前進させる必要があるだろう。

第3に、第4章が提起した、文書保存から見た藩政と村方支配の関係である。これは第7章で掲げられた村方文書管理史研究の課題の裏返しだろう。村方文書とは本来、領主支配を村役人に代行させるためのツールと言える。では、村方や大庄屋などの中間層から提出された文書は、藩庁内でどう処理され、保存あるいは廃棄されたのか。近世地域支配システムを考える上でも重要な論点だろう。

第4に、第1の課題とも関係するが、藩政成立期において藩政文書はどう始まったのだろうか。この点、18世紀後半の画期性を見出した本書ではほとんど触れるところがなかったが、それは無い物ねだりだろう。しかし藩政アーカイブズをその成立時点に遡って考えることは、藩という権力機構・行政組織を理解する上で避けて通れないのではない。そこ

で最後に、不勉強ながら一つの事例を示して後考を俟ちたいと思う。

かつて木村礎は、磐城平藩の藩主内藤忠興の書簡を分析し、その史料の意義を考察した(『内藤忠興書簡一斑』『明治大学刑事博物館年報』11、1980)。その最後で、内藤家文書における初出を忠興書簡と考え、その後に国許から江戸の藩主へあてた伺及び報告を記した「案詞」が作成され、遅れて万治年間に藩政諸事書留である「万覚帳」が出現すると論じた。2つの文書の出現年代は、忠興書簡が寛永14～慶安3年、「案詞」の初出が寛永16年である(神崎彰利「磐城平藩内藤家文書の研究(1)」『明治大学刑事博物館年報』19、1988)。木村は、寛文10年まで藩主だった内藤忠興の書簡が慶安期に消える理由を藩主書簡の機能(藩政への直接指示)が不要になったためと論じ、その背景を「藩政運営の慣例化、日常化」に求めた。

本書を読んでも、藩政アーカイブズの成立時期はおおむね寛永期にあると思われた。その理由を藩主親裁の体制から藩政システムの整備への移行に見て良いなら、17世紀中葉以降における藩主書簡と藩日記を中心にして幕府からの収受文書と併せた姿が、成立期の藩政アーカイブズの姿になると言えるのではない。もちろん、この程度の事実はすでに広く知られたものだろう。ここでは藩政アーカイブズの全体像を展望する必要上、あえて付け加えた次第である。

本書を読んで、藩政アーカイブズ研究の視野が一挙に広がったように思われた。おそらく本書からさまざまな刺激を受けた研究が、今後輩出してくることだろう。この書評がその呼び水となれば幸いである。不勉強ゆえ誤読や取り上げるべき論点を欠落させたことを畏れている。なにとぞ失礼の段はお許し頂きたい。

立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」

—『源氏物語』再生のための原典資料研究の成果として—

伊藤鉄也（国文学研究資料館 教授）

国文学研究資料館は、平成20年4月より都内品川区から立川市に移転し、新たな活動を開始しました。それを記念して、本年10月の1ヶ月間にわたり、「源氏物語 千年のかがやき」と題する立川移転記念特別展を開催します。新装なった展示室は、国宝や重要文化財も展示できる施設です。これまでの品川における展示室を思うと、広さといいその設備といい、比べることのできないほどに贅沢な空間を持つことになりました。

この新しい展示室において、国文学研究資料館らしい展示を目指して、2年前より準備を進めてきました。本年が『源氏物語』の千年紀であることから、テーマは『源氏物語』です。

千年紀となる本年は、日本の各地で『源氏物語』に関するイベントが組まれていきます。

4月26日から1ヶ月半にわたり、京都文化博物館では「開館20周年記念特別展 源氏物語千年紀展 ―恋、千年の時空をこえて―」が開催されました。この展覧会は、13万人もの来場者を集めて話題となったものです。1日平均の入場者数が、なんと3534人です。京都文化博物館の自主企画展としては、過去最高を更新したそうです。

商業施設以外での大きな源氏物語展としては、8月30日から2ヶ月間開催される横浜美術館の「特別展 源氏物語の1000年 ―あこがれの王朝ロマン―」と、9月3日から2ヶ月開催される宇治源氏物語ミュージアムの「源氏物語千年紀特別展 写し伝える美―陽明文庫の源氏物語―」が注目すべきものでしょう。

国文学研究資料館の特別展は、ちょうどこの横浜美術館と宇治源氏物語ミュージアムの開催期間中の10月に重なるものです。国文学研究の情報センターともいえる国文学研究資料館らしい特別展を意識して、以下のような内容で『源氏物語』に関する展覧会を実施します。

◎題名

源氏物語特別展 「源氏物語 千年のかがやき」

◎主催

国文学研究資料館・日本経済新聞社

◎共催 古代学協会

◎後援

中古文学会など

◎期間

内覧会：平成20年10月3日（金）午後

前期：平成20年10月4日（土）～

10月16日（木）【13日間】

後期：平成20年10月18日（土）～

10月31日（金）【14日間】

※土曜日曜祝日も開室

※休室（展示替え）：10月17日（金）

※中古文学会（10月4日～5日

於 東京学芸大学）の展示会場

◎時間 午前10時～午後4時30分

◎会場

国文学研究資料館（立川市緑町 10-3）
1階展示室

◎鑑賞料 400円

今回の特別展は、次の視点から組み立てています。

(1)『源氏物語』の名が初めて文献に現れる西暦1008年（『紫式部日記』寛弘5年11月1日）から1000年目に当たる、2008年（平成20年）を記念する。

(2)この1000年間、『源氏物語』がどのような形で読み継がれて来たのかを、画帖・絵巻・写本・注釈書・翻訳書などを通して一望する。

(3)未紹介資料の初公開・初解説を、展示の目玉に据える。

(4)日本文学研究のセンターたる国文学研究資料館として、調査と研究の成果を展示する（基幹研究「『源氏物語』再生のための原典資料研究」の研究成果）。

また、本特別展の開催期間中には、関連行事として次のものも準備しています。

①ギャラリートーク（講師 伊井春樹 10/12昼・伊藤鉄也・加藤昌嘉）

②連続講演（全5回）「千年紀の源氏物語」 於 国文学研究資料館

講師：室伏信助氏（跡見学園女子大学名誉教授）

平成20年9/30・10/14・10/28・11/11・11/18（毎火曜日）

③第32回 国際日本文学研究集会「物語の過去と未来」 於 国文学研究資料館

平成20年10月11日（土）・12日（日）

④人間文化研究機構シンポジウム「源氏物語一千年記念 国際源氏物語研究集会 源氏物語の魅力」

於 有楽町朝日ホール

平成20年10月13日（祝）

今回の展示品は、国文学研究資料館が所蔵するものだけでなく、次の他機関が所蔵なさっている資料もお借りして構成しています。

- 1) 古代学協会
- 2) 陽明文庫
- 3) 国立歴史民俗博物館
- 4) 天理図書館
- 5) 出光美術館
- 6) 宮内庁書陵部
- 7) 実践女子大学
- 8) 鞍馬寺
- 9) 京都府総合資料館

このうち、重要文化財は次の4点です。

- ◎中山本『源氏物語』(国立歴史民俗博物館)
- ◎陽明本『源氏物語』(陽明文庫)
- ◎大島本『源氏物語』(古代学協会)
- ◎伏見天皇宸翰『源氏物語拔書』(国立歴史民俗博物館)

また、重要美術品は次の1点です。

- ◎『源氏物語絵巻』(天理図書館)

『源氏物語』の過去から現在までの流れを理解する上で、今回の展示品は巧みに選定され、構成されています。

以下に、出品目録を列記しておきます。

他の源氏物語展と少し異なり、やや研究者の視点を盛り込んだ展示を意識しています。それでいて、多くの方々に古典が、古写本がどのように伝えられてきたのかを理解していただけるように工夫したつもりです。

第一部 描かれた名場面

- 【1】『三十六歌仙画帖「紫式部」』(個人蔵)
- 【2】『源氏物語団扇画帖』
- 【3】岩佐勝友画『源氏物語図屏風』(出光美術館)
- 【4】奈良絵表紙『源氏物語』(天理図書館)
- 【5】『源氏物語絵巻』(天理図書館)

第二部 どのように書写されたか

- 【6】中山本『源氏物語』(国立歴史民俗博物館)
- 【7】陽明本『源氏物語』(陽明文庫)
- 【8】歴博本『源氏物語』(国立歴史民俗博物館)
- 【9】橋本本『源氏物語』
- 【10】池田本『源氏物語』(天理図書館)
- 【11】国冬本『源氏物語』(天理図書館)
- 【12】三条西本『源氏物語』(宮内庁書陵)

【13】明融本『源氏物語』(実践女子大学)

【14】大島本『源氏物語』(古代学協会)

【15】色変わり料紙『源氏物語』(国立歴史民俗博物館)

【16】御所本『源氏物語』と檜製糸罫(宮内庁書陵部)

【17】『源氏物語』列帖装未完成本(陽明文庫)

【18】『源氏書写目録』寛永三年(国立歴史民俗博物館)

【19】『源氏書写校合日数目録』宝永元年(陽明文庫)

第三部 どのように鑑賞されたか

【20】河内本『源氏物語』断簡

【21】『源氏物語』断簡 十二葉

- ・「賢木」巻切 伝後伏見院筆
- ・「鈴虫」巻切 伝九条教家筆
- ・「少女」巻切 伝称筆者なし
- ・「浮舟」巻切 伝正親町公叙筆
- ・「花宴」巻切・二葉 伝称筆者なし
- ・「胡蝶」巻切 伝下冷泉少将筆
- ・「明石」巻切 伝津守国冬筆
- ・「東屋」巻切 伝世尊寺定実筆
- ・「少女」巻切・二葉 伝称筆者なし
- ・「桐壺」巻切 一条兼良筆

【22】伏見天皇宸翰『源氏物語拔書』(国立歴史民俗博物館)

【23】霊元院宸翰『源氏詞拔書』(国立歴史民俗博物館)

【24】『源氏物語・新古今集ほか拔書』

【25】『源氏物語歌合絵巻』

【26】『光源氏系図』

【27】『源氏のゆらい』(実践女子大学)

【28】『光源氏一部連歌寄合』

【29】『源氏小鏡』

【30】『賦光源氏物語詩』

【31】『源氏物語歌寄せ』

【32】『源氏物語初音巻聞書』(国立歴史民俗博物館)

【33】『弘安源氏論議』(国立歴史民俗博物館)

【34】周桂本『源氏物語』(天理図書館)

【35】賀茂真淵書き入れ『湖月抄』

【36】『萬水一露』+けんどん箱(個人蔵)

【37】『香図』と『豆本』(伊達家)

【38】与謝野晶子『新新訳源氏物語』自筆原稿(鞍馬寺)

【39】与謝野晶子『源氏物語講義』自筆原稿及び書簡(京都府総合資料館)

第四部 世界文学としての『源氏物語』

【40】さまざまな翻訳本

今回、とくに目玉となる展示品は、新出・初公開となる新収資料『源氏物語団扇画帖』です。これは、日本郵便から今秋9月に発行される特殊切手「『源氏物語』一千年紀」のシートの背景画像にも採用されたものです。

図録には、『源氏物語団扇画帖』の全54枚の源氏絵に詳細な解説をつけました。そして、索引とともに、多方面から利用してもらえる資料になるように構成しています。

『源氏物語』の研究史から見ても意義深い資料が多く、この紙面では紹介しきれません。それは図録に譲るとして、もう一点紹介するとすれば、与謝野晶子の自筆原稿があります。

これは、偶然に残ったものであり、与謝野晶子の執筆活動の一端が伺えるものです。特に、『新新訳源氏物語』の自筆原稿は、所蔵先である鞍馬寺のご理解とご協力が得られ、画像データベースとして特別展に合わせて国文学研究資料館のウェブサイトから公開することになっています。

原稿用紙の升目を大きくはみ出すほどの勢いで書き綴られる、与謝野晶子のほとばしる源氏語りを、ぜひ実際にご覧ください。

そして、国文学研究資料館が、江戸時代までの古典文学作品だけではなく、近代の文学をも対象として情報と資料を調査収集している一端もご覧頂けれ

ば幸いです。

さらに、最終セクションでは、海外で刊行された『源氏物語』に関する翻訳書を展示します。

現在、世界各国で『源氏物語』の翻訳がなされています。20種類の言語で翻訳がなされていることが確認できています。今後は、さらに増えることでしょう。

これらの本は、その表紙のデザインもユニークなものが多いのが特徴です。今回の展示では、翻訳本の中身よりも、その装丁としての表紙のデザインを見てもらいます。『源氏物語』を、というよりも、日本を海外の人たちがどのように見ているのかということが、こうした表紙の絵から伺えると思うからです。

なお、10月12日のお昼には、伊井春樹館長によるギャラリートークがあります。天理図書館からお借りした、貴重な『源

氏物語絵巻』を中心としてのお話が予定されています。これも、楽しみにしていただきたいイベントの1つです。

今年は、京都を中心として、『源氏物語』の千年紀に関するイベントが目白押しです。関東では、国文学研究資料館がさまざまなイベントを通して、千年紀を盛り上げることになります。

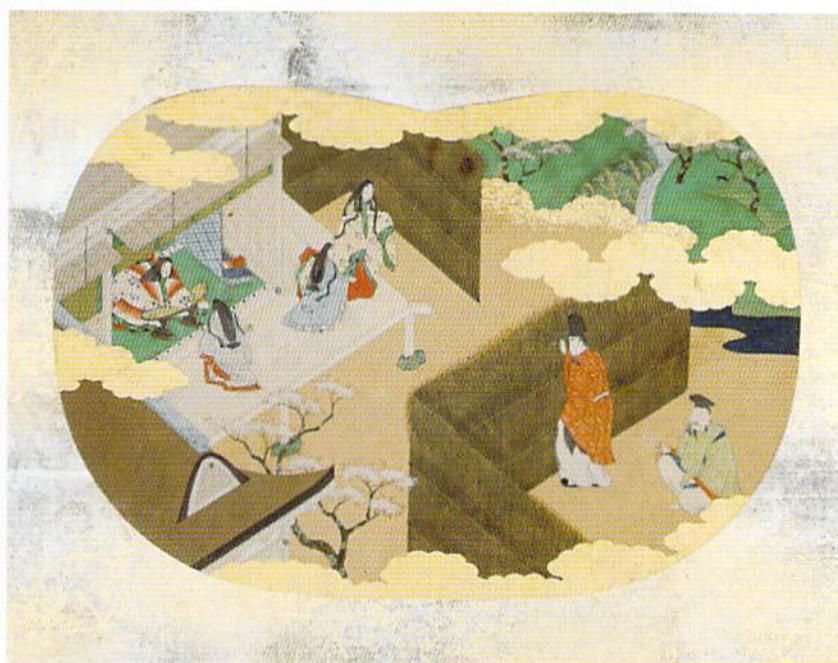
これを機会に、立川に移転した国文学研究資料館に、ぜひ足を運んでください。そして、さまざまな情報の交流拠点としてのセンター的な役割の理解者として、さらには協力者として、また利用者として、今後ともご支援をいただけると幸いです。

特別展「源氏物語 千年のかがやき」が、そうしたコミュニケーションの場を育てる一環となれば、と思って準備を進めているところです。

展示会場にお越しいただけましたら、

今後のためにも、直接係員に、あるいはアンケート用紙を通して、ぜひご意見もお寄せください。

みなさまのお越しをお待ちしています。



『源氏物語団扇画帖』(当館蔵)

機構シンポジウム

国際源氏物語研究集会「源氏物語の魅力」の開催について

源氏物語が初めて記録にとどめられたのは、『紫式部日記』の寛弘五年(1008)11月1日のことです。それから今年まで一千年、ほとんどとぎれることなく源氏物語は人々の関心の的となり、時代を超えて読み継がれ、今なお私たちを魅了してやまません。平安時代以後の作品だけではなく、和歌、美術、芸能、遊芸にも影響を及ぼし、今日ではアニメ、マンガ、さらにはオペラ、演劇、意匠としても享受されるなど、源氏物語は〈文化資本〉として大きな存在意義を果たしています。

源氏物語は時代にあわせての享受がなされ、江戸末期まででも注釈書、ダイジェスト版などを含めるとおよそ600種を超える作品が生み出されてきました。近代になってもその趨勢はさらに加速度化し、現代語訳にかぎっても与謝野晶子の二度の試み、谷崎潤一郎にいたると三回もの新訂を繰り返しています。また口語訳も、円地文子、船橋聖一、田辺聖子、瀬戸内寂聴と倦むことを知りません。

一方海外に目を転じると、1882年にロンドンで出版した末松兼澄の「桐壺」から「絵合」巻までの翻訳を嚆矢として、源氏物語を世界文学として名声を高めたのが1925年から1928年に刊行されたアーサー・ウェイリーの訳でした。この影響の大きさははかり知れなく、以後英語訳では1976年のサイデンステッカー、2001年のロイヤル・タイラーと続き、それ以外にもロシア語、フランス語、中国語、チェコ語訳など現在十数カ国を数え、さらにトルコ語、イタリア語なども近く出されることになっています。このように、源氏物語は今や世界の文学として高く評価され、研究も展開している状況にあります。

そこで、ここに新たに〈世界文学としての源氏物語の魅力〉を、それぞれの立場から報告していただき、また討議を交わす場として、国際源氏物語研究集会「源氏物語の魅力」を下記の要領で開催いたします。

○日 時 平成20年10月13日(月、祝) 13時～17時

○会 場 有楽町朝日ホール

内容は、第一部が「源氏物語の魅力」と題しての基調講演。講師は、国際的に活躍する研究者であるハルオ・シラネ氏(コロンビア大学)、カレル・フィアラ氏(福井県立大学)の両氏に、語り部としても有名な平野啓子氏(大阪芸術大学放送学科)、そして作家の竹西寛子氏です。

基調講演のあと休憩を挟んで、第二部シンポジウム「源氏物語の世界を語る」となります。竹西さんを除く講師の皆さんに、ステイブ・ネルソン氏(法政大学)、ツベタナ・クリステワ氏(国際基督教大学)を加えて、多角的に源氏物語の魅力について語り合います。司会は当館の伊井春樹館長がつとめます。

また、源氏物語一千年を記念して9月22日に記念切手「一千年の源氏物語」が発売されますが、その切手シートのデザインに国文学研究資料館所蔵の絵画が大きく取り上げられることとなりました。これを記念して10月6日の13時30分から15時まで、初刷り切手の贈呈式とともに、フリーアナウンサーの加賀美幸子氏を迎えて講演会を行います。こちらも振るってご参加下さい。

<本シンポジウム参加の申し込みについて>

事前申し込みが必要です。折り返し受講票を発送します。

○申込方法：住所、氏名、電話番号を記入し、往復葉書、FAXでお申し込みください。

※電話、電子メールでは、受け付けていません。

○申 込 先：〒190-0014 立川市緑町10-3 国文学研究資料館源氏物語シンポジウム担当宛

TEL 050-5533-2910 FAX 042-526-8604

締切 平成20年9月26日(金)

移転記念式典について

平成20年5月27日(金)に当館大会議室において、移転記念式典及び祝賀会を開催しました。

式典では、金田人間文化研究機構長、伊井館長の挨拶の後、渡海文部科学大臣(代読:徳永研究振興局長)、清水立川市長、冷泉貴美子氏から御祝辞をいただき、式典終了後、1階交流アトリウムにおいて、展示室のテープカットを行った後、招待者を班別にし、館内見学を行いました。館内見学では、移転記念展示「よみがえる時」の内覧会を同時に行うとともに、閲覧室や地下の収蔵施設、また、当館が行っている研究プロジェクトのパネル展示を見学し、招待者は熱心に見ていました。

祝賀会では、長尾真国立国会図書館長の御発声で乾杯を行い、秋山慶東京大学名誉教授、後藤祥子日本女子大学長、芦澤美佐子鉄心斎文庫伊勢物語文庫館長、松野陽一前館長、名和修陽明文庫文庫長から、御祝辞をいただきました。なお、当日は、招待者約280名の出席があり、大変盛況でした。



式典 館長挨拶



展示室テープカット

移転記念特別展示「よみがえる時」の報告

5月26日(月)から6月20日(金)まで、移転記念特別展「よみがえる時—春日懷紙を中心に—」を開催しました。移転記念にふさわしく、普段はなかなかご覧頂けない当館の貴重書を中心に、古典文学の名作や近代文学の作品、歴史史料を織り交ぜました。

新しい展示室は352㎡、これは従来の3倍近い広さです。まずは空間設計の難しさを痛感しました。かなり細長い部屋ですので、さらに動線を検討する必要があります。2月の移転から5月開催までの間、慌しく展示ケースや照明など展示室の作り込みを行い、この新たな空間の使い勝手を確かめながらのスタートとなりました。

広報活動も行いましたが、移転後もないことで、どのくらいご来館頂けるか心配しました。けれども、連日途切れずに参観者をお迎えでき、沢山の感想やご意見を頂いたのは嬉しいことでした。来館者は小学生から80代と幅広く、研究者、会社員、学生、主婦とさまざま、職業欄に「古典愛好者」と書いて下さった方もおられました。初めていらして下さった方に加え、品川の戸越時代から引き続き来て下さった方も少なくありません。

幸い、アンケートでは全般に好評で、特に人気が高かった作品は「春日懷紙」や「金春禅竹自筆伝書」、『隅田川兩岸一覽』『捕鯨絵巻』や御伽草子など挿絵の見事なもの、『曾我物語』『徒然草』『好色一代男』など版本の名品でした。「まくらのそうしが見たかった。ざんねん」(小学生)という頼もしい感想も。

今回はシンプルな展示を心がけてみましたが、詳しい解説や翻刻もケース内に添えて欲しいとのご要望もあり、そのほかのご意見と共に今後に生かして参りたいと思います。

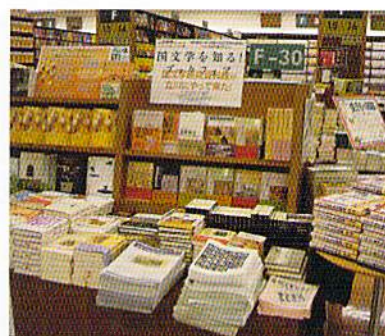
なお、今回の展示図録(1500円)と絵葉書セット(4枚200円)は継続して販売いたします。図録は「春日懷紙」の全紙背の図版も掲載したカラー版です。お手にとって頂ければ幸いです。

これからも是非、国文学研究資料館の展示室に足を運んでみて下さい。



立川市オリオン書房におけるブックフェアの開催

6月中旬から7月中旬にかけて、立川市を中心にいくつかの店舗を展開する大規模書店オリオン書房のノルテ店(多摩モノレール立川北駅北側)において、当館の立川移転を記念し、「国文学を知る!ブックフェア 国文学研究資料館が立川にやって来た!」と題するブックフェアが開催されました。フロア中ほどの平台の一角に、館長・副館長以下教員の著書、研究プロジェクトの成果物、連続講演の記録、リプリント近代文学など、当館の研究と事業に関わる書籍を初めとする国文学関係の書籍が陳列されました。このブックフェアの実現には、笠間書院の多大な協力があったことを、特記します。



オリオン書房ノルテ店 店内

子ども見学デーの開催

国文学研究資料館・夏の恒例イベント「子ども見学デー」を本年も開催いたします。

当館では、日本文学の次世代への普及を推進し併せて地域のみなさまとの交流を図る一環として、毎年一回「子ども見学デー」を企画してまいりました。夏休みの一日を利用して、子どもたちが広く社会を知り親子のふれあいを深めるきっかけにも、また、当館の業務に対する理解を深めていただくことをも目的としています。

今年度も小学生を対象として、保護者の方と一緒にご来館いただきます。日本の文学や伝統文化に触れることで心の豊かさを養い、「広く学び・深く知る」楽しさを体験していただければと考えています。

内容は、展示室でのギャラリートークを含めた館内見学のと、「歌会始で百人一首」と題したカルタ取り大会を行います。最初に当館の先生が百人一首のお話をします。つづいて、狩衣を着用した3人の先生方が綾小路流の歌会始のやり方で披露(歌を読み上げる)を行い、読まれたカルタを参加者が競って取るという雅やかで楽しいイベントです。ご期待ください。

■日時 平成20年8月27日(水) 14:00~16:30

■内容 (1)館内見学 (2)歌会始で百人一首



平成19年度子ども見学デーの様子



平成20年度子ども見学デー チラシ

新収資料紹介(表紙絵紹介)

新収資料紹介 源氏物語画帖(ヤ8-277)

源氏絵11枚を貼った画帖。詞はなく、絵のみ。絵は各縦16.0横15.4釐前後。土佐光則(1583-1638)の源氏絵との関係が推測される京都市立芸術大学芸術資料館蔵の土佐派の源氏絵粉本に見られる構図とほぼ同一の構図で描かれている絵があり、土佐派の源氏絵に関する規範化の様相を知るうえで有用な画帖。場面は、1鴻臚館で高麗の相人が光源氏を親相する場面(桐壺巻)、2中川の紀伊守邸で小君が光源氏を空蟬のもとに導く場面(空蟬巻)、3五条の宿で光源氏と夕顔が物語する場面(夕顔巻)、4北山の僧坊で眠れぬ一夜を光源氏が過ごす場面(若紫巻、右図)、5雪の夜に故常陸の宮(末摘花)邸で光源氏が垣間見する場面(末摘花巻、左図)、6二条の院で光源氏が笛を吹きながら紫の上の居所をのぞく場面(紅葉賀巻)、7左大臣邸で中納言の君と一夜を明かした光源氏を描く場面(須磨巻)、8二条の院で光源氏が紫の上の髪をそぐ場面(葵巻、表紙右図)、9賀茂の斎院で朝顔の姫君が光源氏から木綿を付けた櫛を文枝にした消息を受け取る場面(賢木巻、表紙左図)、10光源氏が麗景殿女御のもとを訪ねて昔話をする場面(花散里巻)、11宮中の弘徽殿の細殿で光源氏が朧月夜と出会う場面(花宴巻)。



総研大日本文学研究専攻 専攻院生の学会賞受賞について

このたび、日本文学研究専攻博士後期課程3年次生の一戸涉さんが、平成19年度日本近世文学学会賞を受賞されました。対象となったのは、前年度同学会での口頭発表に基づいて、機関誌「近世文藝」87号(2008年1月発行)に掲載された論文「礪波今道と上方の和学者たち」です。

礪波今道(となみ・いみち)という人は、初期読本『雨月物語』などで有名な18世紀上方の和学者上田秋成の周辺人物として名前が知られていましたが、それ以上言及されることはありませんでした。一户さんは、この論文で、今道が秋成と同様の道筋をたどって和学者になったという事実をはじめ、彼の本業は越中(現富山県)高岡の漆芸家であったこと、また、京都遊学の折の多彩な交友関係など、和学(国学)を中心に、当時の上方文芸家たちの活動を、広々と見渡すことに成功しています。これは、国文学に係わる文献資料はもとより、高岡に残る郷土資料類の詳細な調査を通じて浮かび上がってきたもので、あくまでも資料に即して今道の伝記構築を目指した一户さんの地道な努力が報われたものと言えます(なお一户さんは、この論文の基礎となる詳細な年譜を「礪波今道年譜稿」(「総研大 文化科学研究」第4号、2008年3月)にまとめています)。

授賞式は、6月7日(土)、大東文化大学を会場とする平成20年度日本近世文学学会春季大会の、総会の場で行われました。授賞理由の説明に続いて賞状授与が行われ、続いて一户さんが謝辞を述べました。受賞への戸惑いと周囲への感謝、今後の抱負を簡潔にまとめた、若者らしく清々しいスピーチでした。今回の受賞は、ご本人にとって何よりの励みであるばかりでなく、専攻全体にとっても、今後の活動に向けてのエネルギーとなる慶事でしたので、この場を借りて紹介させていただく次第です。



謝辞を述べる一户氏

● 7月から図書館の土曜開館が始まりました

7月から土曜開館が始まります。サービス時間、利用できる資料に制限がありますので、注意してご利用ください。

○開館時間…………… 9:30～17:00 正面出入口向かって左の休日出入口で記帳してください。

○複写受付時間…………… 9:30～15:00 マイクロ資料の複写は全て後日渡しになります。

○資料の出納…………… 9:30～15:00、13:00～16:00

史料・貴重書・特別コレクションは事前予約制になります(撮影も同時に予約してください)。予約が集中した場合や希望点数が多い場合は、希望日に閲覧できないこと、あるいは点数を制限する場合があります。

○予約受付期間…………… 1ヶ月前からその週の土曜17時まで。

○予約申込方法…………… 「土曜閲覧予約申込書」または以下の項目を、メール・FAX・郵送で提出してください。
直接カウンターでも受け付けます。

○予約申込に必要な項目…・氏名 ・連絡先(電話/FAX/メール) ・閲覧希望日
・閲覧希望資料(請求記号・資料名・部編等)

○閲覧不可の連絡…………… 希望日に閲覧できない場合は、こちらからご連絡します。

連絡先	国文学研究資料館管理部学術情報課 情報サービス係 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 電話 050-5533-2926 FAX 042-526-8607 メール etsuran@nijl.ac.jp
-----	---

● 次号までの閲覧室の開室予定カレンダー

■青・■水色は休館日 ■黄色は土曜開館日

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

● 連続講演について

「千年紀の源氏物語」 講師:室伏信助(跡見学園女子大学名誉教授)

「源氏物語」の名が初めて文献に現れる1008年(寛弘5年)から1000年目に当たる、2008年(平成20年)を記念して、本連続講演を実施します。

開催日時:第1回 9月30日 「幻想から理想へ -源氏物語大島本の本姿-」

第2回 10月14日 「「人なくてつれづれなれば」 -本を見つめるということ-」

第3回 10月28日 「竹取物語からうつは物語へ -源氏物語の承けたもの <その一> -」

第4回 11月11日 「伊勢物語と在五が物語 -源氏物語の承けたもの <その二> -」

第5回 11月18日 「紫式部日記という物語」

各回、15:00～16:30

定 員:120名

聴 講 料:無料

応募方法:往復はがきに住所、氏名を御記入のうえ、〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 国文学研究資料館「連続講演」係まで

※応募多数の場合は、抽選を行います。締め切り:9月10日(水)

● ニュースレターの統合・リニューアルについて

本誌は、これまで発行していた「国文学研究資料館ニュース」「アーカイブズ・ニュースレター」(既刊8号)の後継誌です。立川移転を契機に、広報記事に加えて研究内容をも紹介する誌面として刷新を図りました。